

# 幼馴染との約束

ぽぽろ@明天

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「ゆびきりげんまん。うーそついたら針千本のーます。ゆびきったー！」

「やくそくだからねー忘れないでねー！」

これは彼ー加瀬千尋が小さい時にした約束

そんな彼も高校生になった。

そしていきなり彼を取り巻く状況が変化する…

# 目次

約束

1

1



# 約束 1

「ゆびきりげんまん。うーそついたら針千本のーます。ゆびきつた!」  
「やくそくだからねー! 忘れないでね!」

これは小さい時に2人で交わした約束。

——の約束。彼と交わした大切な約束

彼は私の中では特別だった。

昔からずつといるのに、私はずつと彼の事が好きだから。

けどもう1人の幼馴染もまた同じだろう。

けど告白は出来ない。振られたら立ち直れないだろうから。今までの関係が崩れるのが怖いから。

けど伝えたいこの気持ち。

そうじゃないときつと誰かに取られてしまうだろうから。

朝の優しい太陽の光に照らされ起きる少年。

「約束か…」

誰かとした約束けど今は忘れてしまった。

何の約束をしたかも。

「珍しい夢を見るもんだ。」

そして彼は学校に行く準備した。

欠伸をしながら登校している少年は、

加瀬 千尋 かせ ちひろ

「やつほー☆千尋。」

今挨拶をした少女は今井リサ。

俺の幼馴染だ。

「おはよう。千尋」

そしてもう一人の幼馴染 湊友希那

「またゲームしてておそくなっただんではよ。駄目だよ！早く寝ないと二人とも」

「レベリングに夢中だったんだよ。」

「私は、新しい曲を考えていたわ。」

はあー。と溜め息をつくりリサ

「溜め息をつくとき幸せ逃げるぞリサ」

「溜め息程度で逃げる幸せなら要らないよ…」

「だめよ。リサ。小さな幸せも逃さないでおくべきよ。」

そして小さく可愛らしく欠伸をする。

そして眠気で前を見ていなかったのであろう友希那がつまづいて転びそうになったのを支える。

支える時に顔が近くなってしまったが、どうせ幼馴染だ。

しかし友希那は、顔を赤らめている。

…風邪でも引いたのだろうか

そしてリサは何故か黒いオーラを纏い睨んでいる。うん。怖い。めっちゃ逃げたい  
そして手を見ると彼女の胸部の辺りを触っている事に気づき、慌てて手を離す

「ご、ごめん。友希那」

「べ、別にわざとでは無いのでしょう？

親切心でやってくれた事だから私はべ、別に構わないわ。」

そして俺は、感触を確かめるように手を動かす。

…友希那はひんに「グハア！」

心の中で言う前にリサに蹴られる。

「あーあ。これは紗夜に報告かなあ。」

「ごめんさい。わざとじゃないんです。許して下さい。紗夜さんに報告だけは、どうかご勘弁を！」

そのまま土下座する。全面降伏だ。

あの紗夜さん相手じゃ無理！怖いもんあの人

そのまま他愛のない話をしながら学校に向かった：

「ちよつと付き合ってくれないかしら？」

授業が終わり帰る生徒や部活に向かう生徒がぼちぼちいる中友希那は、訊ねた。

「別に用事はないけど…どこだ？」

「いつもの場所よ。」

「分かった。」

そして俺達はいつもの場所へ歩き出す。

いつもの場所とかズバリ！

猫カフェだ。

彼女は、未だに猫好きがバレていないと思ってるらしく、隠している。

…別に皆知ってるけどなあ。

「にゃおーん。にゃおー♡」

彼女は絶賛（彼女の中で）猫と会話中だ。

いや。可愛いけど

店員さんが寄ってきてきてメニューを尋ねる。



「ご注文は何ですか？「兎でー」お見掛けした所ごカップルの様ですので、カップル限定メニューなど如何でしょうか？」

ボケようとしたら店員に邪魔されたぜ。

悲しい。

「あのカップルじゃー」「それでお願ひするわ。」え？」

「かしこまりました。」

「き、曲で恋愛の歌作る時為になると思ったのよ。」

「ふーん。頑張れよ。」

その後青い液体が入ったグラスにストローが2つついたのが来て俺無事死亡。

さよなら。次回作にご期待下さい。

…なんて事は出来ない。

残念だったな！まだ続くぞ！

帰り道彼女と公園で休む。

「あ、あれは凄かったわね。」

「お、おう。そうだな。」

そして2人に沈黙が訪れる。

「よし。」

彼女は何かを決心したようにそう小さく言葉を零す。

「突然で悪いけど千尋。」

私と付き合ってくれないかしら？」

「はあー。次はどこだ。」

「そ、そういう意味じゃないのよ。好きなのよ。私。貴方の事が、異性として」

いつも幼馴染としてしか見ていない俺がその瞬間、友希那は1人の女の子である事を認識する。

「は？」

色々考え熟考の末に

それが最初に出た言葉だった…